

日高郡古記ぬきが記

日高郡古記ぬきがき

主として續風土記によりこれに名所圖會、御幸記、熊野遊記等を配したるもの。

(紀伊)

(紀伊)

(熊野)

三十年前の原稿を整理したもので、何等新味を求めたものでありません。

ただ 日高郡誌及び續風土記等は大部なものである上に、今や殆んど手に入り難く、極めて初歩なこの種の郷土誌常識を得たい人には、無意味でもなからうところなものに刷りました。

誤なからむがために、郡史の權威森彦太郎氏の御補正を仰ぎました。

筆記の煩はしさから、詳を主とせずして省を主としました。

氣づいた点も細かい自分の氣にをまぬのはすて、又俳句・漢詩はすてました。

日高郡

和名抄に曰ふ

紀伊國(註畧)管七

伊都 那賀 名草 海部 在田 日高(比太加) 牟婁

日高の郡

財部 清水 内厚 石淵スフチ 南部 餘戸(板本に全戸あり余戸の誤寫か)

紀伊名所圖會にいふ 内厚は内原の誤りなるべし

古は六郷なりしが郷名の廢せし後は十八莊となる

○ 續日本紀に曰ふ

(七〇三年) 大宝三年五月 紀伊國奈加、名草二郡をして布調を停めて糸を獻せしむ。但し阿提あて、飯高ひらたけ、牟婁三郡は銀を獻ずるなり云々

但しこれより以前日本書紀神功皇后の條に既に『太子に日高に會す』と記載され居れば、飯高の稱は伊勢にありし飯高郡の混用にあらざるか。尚同じ頃水高と記されたることもあり(續日本紀(七五五年)天平宝字八年の條)

注意すべきは當時の元正天皇(七一五〜七二四年)の御講 水高或は飯高と稱せられしことなり。

○ 紀路歌枕といふ書に『紀伊七郡をよめる』(和泉式部として)

(伊都)(那賀) (名草) (海部)(在) 田 (日高) (牟婁)

いと長く 世は慰みの餘りあり 絶えず日高の 室にすまばや

とあり。紀伊續風土記には いと長き世は慰まらず。あまりあり云々 作者は 仲文とせり

○ 人國記に紀伊國の氣風をしるして日高郡に及ぶ 曰く【人國記は北条時頼の書と傳へらるれど 古くより異説あるは人の知るところ】

紀伊

當國の風俗は不健氣第一にして陽氣甚賤しく上は下を貪り下は上を侮り法令を用ゐず 就中牟婁 日高郡 有田郡は我慢なり 意地強く立つるかと思へば又弱くして 詰まるところの奥意極らず 譬へば昨日敵となりし人にも今日は從ひ 又先に異変あれば己れ一分の一揆を企つるの類あり 此故にや郷々に名主・庄司と號して一分に主君を立つ 治承(一一八〇年)の乱の時分よりを聞傳ふるに 誠にこの風思ひ當れり 伊都、名草、那賀海部郡の人は南部よりは氣柔かなり 然れども差かかりたる意地のみにて 是も詰りたる心底聊もなし 又悪を知りてそれに從ふ程の意はなけれども 慾の深きこと日本に双ぶ國あるまじ 只利を面前にあらはし實義露もなし 兩伊、兩丹、石州五ヶ國に比すれば意地強し

○ 文學博士喜田貞吉氏曰く

往古(ヒダカ)或は(ヒダ)と稱する地は皆大和民族以外の異民族の居住せしところなり。往昔は異民族をさして(ヒダ)或はヒナ(夷)といふ。ダとナは通音なれば同語なり。ヒダカ即ちヒナ力なり。夷の居りしところなり。と (力は所を現はす古語なり(住みか)(在りか)(山が)等の如し)

松岡靜雄氏も同様の意見にて(ヒタ族)の住所を意味すと云はれ居る由なり。『日高く天のまほにいまして云々』といふ續風土記の解釋は漢字に拘泥せるなるべし。

古事記に廣袤 東西十八里 南北十里とあり。

○

【熊野御幸記所出王子名(京阪ヨリ順々にしるせる程なり)】

坂口王子	コウト王子	阿部野王子	境王子	大鳥居王子
篠田王子	平松王子	井口王子	池田王子	淺宇河王子
鞍持王子	胡木新王子	サ野王子	粉井王子	厩戸王子
信達一之瀬王子	地藏寺王子	ウ八目王子	中山王子	山口王子
川辺王子	中村王子	ナクチ王子	和佐王子	平緒王子
(サ王子イ本ナシ)	松阪王子	松代王子	菩提房王子	祓戸王子
藤白五躰王子	塔下王子	橘下王子	トコロ王子	一壺王子
<small>(カブラサカならむ)</small> カフウサカ下王子	山口王子	イトカハ王子	サカサマ王子	
井関王子	ツノセ王子			
沓カケ王子	内ノハタ王子	田藤次王子	愛徳山王子	クワマ王子
イハウチ王子	塩屋王子	ウヘ野王子	ツイノ王子	イカル王子
切部王子	中山王子	磐代王子	千里王子	三鍋王子
ハヤ王子	秋津王子	丸王子	ミス山王子	ヤカミ王子
稲葉根王子	一瀬王子	アイカ王子	重照王子	大阪本王子
近露王子	湯川王子	猪鼻王子	發心門王子(ニツアリ)	
尚 本宮参拝以後の記事に(此道又王子数多御座云々)とあり】				

日高郡内

衣え 奈な

吉田東倍氏の地名辞書にいふ

應神天皇尚孩提にまします時武内宿禰抱き奉り、南海を横絶して着船したまへる日高行宮の旧跡とす。衣奈は胞衣エナの義にや、筑前國に宇瀨ウミ八幡宮あり江奈八幡宮と對比すべし。

尚日高郡にては胞紐ハツナ(後産の臍の緒)を(ヤナ)といふ。通音也

神功皇后の御着船地は大引オホヒキにして、それより衣奈に到られしが如し

○

衣奈八幡宮は應神天皇 筑紫より南海土佐沖を経て紀伊に入り給へる時の御着船地なり。所謂日高行宮即ち是なり。

日本書紀にいふ

皇后 忍熊王師を起して以て之を待を聞き食し 武内宿禰皇子を懐き横さまに南海を出で紀伊の水門に泊る云々。

而して其時大引に岩守といふものあり。和布を奉りて饗しまつる。これにとみと云ふ姓を賜ひて子孫にこの地の下司職をたまふ。

茲に藏する八幡宮縁起一筐は、應永九年(一四〇二年)(紀元二千六十二年)右大臣藤原長親(花山院明親)の書せるものにして、
明曆二年七月勅命によりて起稿するといふ。

春山の花を折りてもかへるかな 釣りのいとまや衣奈の浦人

(神野易興)

白崎

野呂隆訓の松廬遺稿 紀伊名所圖會等にも出でたり。當時猿の棲息せしが如し。

白崎はさきくありまで大船にまかぢしじぬき又かへりみむ

(萬葉集)

○ 附近のあしか島は以前海獺群集したりしが今は絶えたり。秋の土用より春の土用までこの島に居り、官命の外は捉ふることを禁じられたりといふ。明治の初年(一八六七年)には尚多数棲息せしよしなり。

あしか寄る由良のありその汐風に岩もとゆする浪の立つ見ゆ

(橘 平之)

にはをよみ霞をいそわに立つ浪はあしかの遊ぶところなりけり

(神野易興)

かげろふや あしかの眠る 岩の鼻

(楽 叙)

由良

武家時代莊園の盛なりし頃この地は、後鳥羽天皇の後 修明門院の御領たりしことあり。又東鑑に文治二年八月二十三日(紀一八四六)蓮華王院領紀伊國由良の庄に於て云々』の記事あり

【本宮参拜以後の記事に 此道又王子數多御座云々 とあり】

將軍記に明德三年二月(紀二〇五二)山名義理等六十三人此に至り興國寺に至りて出家離散す云々

山名義理初め紀伊國守護として藤白に居る。元中(一三三四、一三九二年)の末其一族 満幸と共に反す。將軍足利義満、

大内義弘をして之を討たしむ。義理一族と共に由良にのがれ興國寺に入り出家離散す。

○

源實朝夢に前生は宋の温州雁蕩山に因ありて、この故に日本の將軍となり得たりと見しを以て、近臣葛山五郎景倫をして入宋して雁蕩山の圖を寫さしめむとせしが、果さざる中に殺逆にあへり。五郎(法名願性といふ)悲しみて高野に登り實朝を弔ふ。二位尼政子之をあはれみ由良地頭職を授く。

承久三年(紀一八八一)始めてこの地に來り、安貞元年(紀一八八七)茲に西方寺を創む。後人より實

朝の遺骨を得て、これを埋め寺中に石塔を建つ。然るに當時僧覺心入宋の志あるを聞き、これに實朝の分骨を托して、かの山に納めむことを請ふ。覺心諾して寶治三年(一二四九年)國を發して入宋、歸朝するや願性開山住持として西方寺に請す。(西方寺は眞言宗なりしが、後禪宗に革めたり。興國元年後村上天皇より更に興國寺の號を賜る)

○ 覺心は信濃の人なり。姓は常澄氏。(一二四七、一二四九年) 宝治年間宋に入り、源實朝の遺骨を經山(キンザン)に葬り止まること六年、無門和尚(一にいふ佛眼)に禪意をとひ、歸朝して高野山禪定院に入り首座(シュンツ)となる。次で願性創立の由良西方寺に入り、その後龜山天皇の追證を賜はりて法燈國師と称せらる。後更に法燈円明國師の號を後醍醐帝より賜はる。所謂經山寺味噌は彼のもたらすところにして、廣村の某これを傳へ、更にこの味噌のタレより思ひつきて、茲に醬油を創製し、所謂湯淺醬油ここにおこりて、日本の元祖となれりと傳へらる。

覺心宋にある時、普化禪師十六世の孫張參に虚鐸(尺八)一曲を授かり、歸りて弟子寄竹に傳ふ。寄竹後これを吹きて諸國行脚をなし、普化宗ここに起るといふ。

(張參 或はいふ張盡、或はいふ張雄、もし張雄とすれば無門和尚のことなりと)
興國寺は戰國の乱に荒廢せしが、慶長中淺野氏僧天寂に命じて之を修復し、靈光又輝けり。

○ 撰集抄にいふ(西行法師のこと) 撰集抄にいふ(西行法師の著と傳へられ居れど異説あり)

過ぎにし頃紀伊國由良の岬をすぎはべりしに、渚近く釣船漕ぎよせて四十(よそぢ)にかたぶき五十(いそぢ)斗りにえ侍る男の舟の内に泣きゐたる侍り。何なる態(わざ)を愁ふらむと哀れにおぼえて深く水におり立ち船ばたにとりついて、いかに何を嘆くらむといふに 此の男泣くなく聞ゆる様、是は釣するものに侍り、只今この浦にて殊に大きな龜の釣られて侍りつるを 殺さんとしはべりつるに 龜左右の眼より紅の涙をながして嘆くかたちの見え侍りつれば、あまりに悲みてゆるして本の

所にはなたむとし侍りつる。このつれの釣人つりうど刀にて目をつきてはべりつれば、くるめき迷ひつるが 餘に身にしみて悲しく覺えはべるとて、舟よりとびおりて濱にあがりて 願はくは頭おろしてえさせよと云ふを、いかがとためらひ侍りしかども、げに思ひとりて見え侍りしかばかみをそりて侍りき。さて我に伴ふべしとてそれより具足して 高野粉河まはりありきて、つひに都にのぼりて西仙聖人の庵に引きつけ、發心の因縁ガなど語り奉り侍りしかば哀れなる事かな。

【境は南西にかはるといへども かれも釣人、我れ等もつりうどなる あはれさよ、よしよし是れにおはせよとて行すまして侍り、今にめでたき後世者にて西道となむ云ふめり云々。】
由良守應(義溪と號す)は大字門前の人なり。明治天皇の時宮中に仕へて馭者たり。皇后の馬車に馭して行啓に奉仕せしが、馬物に驚きて馬車轉ず。皇后畏くも地に墜ちたまへりといふ。これに因つて職を免ぜらるといへり。生家を(イガダ)といふ。今なし。

○

朝びらきこぎ出でて我は湯羅ゆらの埼さき 釣するあまを見てかへりこむ (萬葉集 持統天皇)
妹いもが爲め玉をひろふと木の國の ゆらのみさきにこの日暮もつ (萬葉集)

紀の國や由良の港にひろふてふたまさかにだに逢ひみてしがな (新古今和歌集)

紀の國や由良の浦風しづかにてかすむ港に春はきにけり (安嘉門院)

湯羅の崎潮ひにけらし白神の磯の浦みをあへてこぎどよむ (萬葉集)

紀の國や由良の岬に日かずへて數かぎりなく珠ひろふなり ()

紀の海や磯浦かけてかすむら由良の港の春のあけぼの (左近衛中將宗尹)

紀の國や由良の岬の月清み珠よせかへる沖の白浪 (源 師光)

紀の國や由良の湊に風立ちて月の出しほの雲はらふなり (右大臣源頼通 通)

紀の國や由良の湊の朝ぼらけ霞のにはに舟こぐらしも (後小松院)

紀の國の由良の戸荒る渡船われみさきよりいくかひもなし

(民部卿爲家)

たれここに霞をわけて紀の國や由良の岬をわたる舟人

(兵衛 内侍)

うちはへて秋はきにけり紀の國や由良の岬のあまのうけなは

(源 實朝)

沖つ風浪吹きたてて紀の國や由良のと渡る春立の雨

(長 親)

右は明に紀伊國由良に關するものなるが、由良のとは紀淡海峽にも用ふる故、いづれか淡路の由良と別ちがたきものもあり。されど珠ひろふ【といひ、由良の岬】とあるはすべて紀の國の由良によめるものなるべし。

○

花鳥のにほひも聲もさもあらばあれ由良の岬の春のひぐらし

(定 家)

ゆふかすみ入日を浪にゆらの崎浦路くれゆくはるの空かな

(家 衡)

浪の音もふしある御代の春風に由良の岬をわたる舟人

(康 光)

ゆらのとや浪路の末ははるかにて有明の月にわたる舟人

(平 政村)

おひて吹く風にまかせて由良のとの遠きもしらず由良の船人

(藤原基雄)

珠ひろふ由良の湊に照る月の光を添へて寄する白浪

(北 重時)

さくら咲く山には春もなかりけり由良の岬のあけぼのの空

(順 徳院)

秋ながら木の葉がくれもなかりけり由良の岬の有明の月

(全 上)

夜舟こぐ由良の岬の潮風に聲を帆にあげて鳴くちどりかな

(花山院長親)

由良のとをこきいでて見れば藤白のみ阪はるかに雲ぞかかれる

(慶雲法師)

泊舟由良の湊の浪まくらゆめもむすばであかす夜はうし

()

風さむみ由良のとわたる月かげにゆくへも知らず千鳥なくなり

()

あかつきや小島がいその松風に衣かさねよ由良の浦人

(源 令綱)

（令綱は紀藩士 阿戸にすみしといふ）

由良のとや湊こぎ出るかぢの音もはるかにかすむ鴈の一つら

（宗祇法師）

比井

比井はヒの延音にて呼称の便より二字にあてはめたるもの。日の岬などと関連ある言なりと風土記に辨ぜり。北方の山上城址は湯川直春の砦なりといふ。

若一王子社は宝曆七年修理の時（紀二四一七）境内より經筒を發掘、中に法華經八卷を納めあり、跋（一七五七年）に保元三年戊寅（紀一八一八）とありといふ。今國寶となる。

畠山政氏（一六二五年）の役（紀二二七五）にこの海辺にて戰死すといふ。

みつぎものはこぶ小舟やよりくらし唐子の浦のあまのさへづり

（紀 眞狙）

いそ近く和布刈りほすあまの子の宿もしられずかすむ春かな

（本居大平）

産湯

應神天皇の御誕生に關係ある如く傳へらる。天皇に産湯を奉りしその焚き火は少しも消さず。千五百年を傳へて續風土記編纂の頃尚ありし様にしるせり。今は知らず。

附近阿尾○ あせで（はせで）の崎の一角を鉾突の岬といふ。神功皇后御上陸の地なりといふ。

小阪旧道に沿ひて五つ石あり。花山法皇熊野御幸の時、腰かけさせたまへる様につたへ聞くがいか
が。

志 賀

誕生院は徳本開祖とす。父は田伏三太夫、母は塩崎氏の女なり。家系畠山重忠に出づといふ。
寶曆八年(紀二四一八)六月二十二日生る。幼名三之丞、翌年仲秋の夜満月に向つて名號をとふ。
長じて佛に皈す。天明四年(紀二四四四)財部往生寺に落髮す。徳本と称す。念佛三昧を以て勤と
す。これより白馬山脈の麓に庵を結び穀食塩味を絶ち、晝夜七度千津川の流れに垢離し、念佛を日
課とす。積んで七年餘、日に一萬遍をとふ。乱髪肩を掩ひ、皮膚枯燥す。人請ひて名號をかきて
もらひ、刻して碑に建つれば奇特あり。澤池の側に立つれば妖氣を鎮す。後奥州に入らむとして、
ここを出でたるに歸依多きにより、道を枉げて萩原に住まること三年、これより塩津及有田郡須谷
にて苦行し、後攝津勝尾寺に飛錫する。文化九年(紀二四七二)藩より召されて、名草郡和佐山の草
庵に居ること三年、更に江戸に赴き官より小石川一行院を賜はり茲に居る。文政元年十月(紀二四七
八)念佛の聲と共に逝く。

日の岬

今燈台のあるところを日の山といふ。海岸に屈かがみみ岩あり。續風土記に鏡岩とせるは誤なるべし。
古昔天皇牟婁への行幸に、船を由良にとどめて陸路をとられしは、この海岬の波浪あらしきを避けら
れたるなるべしといふ。和田村の御崎神社も、この岬の守りとして鎮坐するものにて、茲を通過す

るもの必ず奉幣せしとなり。古く風早山といふ。
萬葉集に

風莫の濱の白浪いたづらにここによりくる見る人なしに

とあるを、紀伊名所圖會にはここなりとし、熊野遊記には西牟婁郡網不知の海灣を、靜なる海故呼ぶとせるも、いづれも首肯しがたし。網不知の濱は白浪のよりくる如きところにあらず。徳本上人のこの岬にて念佛せし時、多數の海豚わき出たりといふ。

三尾

古昔三穂の浦といふ。後轉訛して三尾といふ。三穂岩室を以て特に知らる。岩窟は龍王神社下手の海岸にあり、久米の窟イサヤともいふと。日高鑑といふ書に(ウツシノアナ)と記され、續風土記にも土俗(ウツクシナ)といふと記されたれば、斯様の名称にて傳はり來りたるなるべし。

この石室は萬葉に、博通法師紀伊國に往いて三穂石室を見るとし、久米の若子ワカゴがいましける由歌へるより有名なれども、ここに住める久米の若子が果たして如何なる人なりしかは明ならず。日本書紀に顯宗・仁賢兩帝の皇親にいませる久米の若子といふ方が、播磨の國の石室に居られしよし記載あれば、本居宣長は萬葉集にある博通法師の歌の『紀伊國に往いて』とあるを、播磨の誤ならむといへり。

尚三穂石室の所在について、紀伊續風土記には和田村西山の山腹にある淨明寺跡といふところならむとし、或は後人の御崎神後の森中、八王子祠趾ならむとし、石碑など立てたるものもあれど信ずべからず。萬葉集の歌に

みづみづし久米の若子がい觸れけむ磯の草根カヤのからまくをしも

とあれば磯ぎはにある現在の三穂窟は、或は實にちかがらむ

○

風早の三穂の浦みを漕ぐ舟の舟人さわぐ浪立つらしも

(萬葉集)

はたすすき久米の若子がいましける三穂の石室はみれど飽かぬかも

(萬葉集)

常盤なす石室はいまもありけれど住みける人ぞ常なかりける

(萬葉集)

風早の三穂の浦わの白つつじみれどもさぶしなき人思へば

(萬葉集)

石室イシヤどに立てる松の木なを見れば昔の人を相みるごとし

(萬葉集)

浪かかる三穂の浦への白つつじいづれを花と見てはたをらむ

(新撰六帖)

たえずのみもしほ焼くてふ風早のみほの浦わに煙立つなり

(信實)

紀の國の三穂のいはやもさすがなほ風こそふるき松に吹くなれ

(夫木集)

古のみほの岩やは苔むしてみれどもあかずとこめづらなり

(俊成)

夕日かけ入る海すずし沖つ風松にこたふるみほの浦なみ

(夫木集)

わが戀はみほの岩やにふる雨のいづこもりてか人にしられむ

(衣笠内大臣)

みほのあまの夜ひるかづくかひあらしぬ玉（草）もまじらぬ浦のもくづは

(窓臥)

みづみづし久米の若子がいふれけむ磯（草）のかやねのからまくをしも

(萬葉集)

和田

名所圖會にいふ

和田浦は中古熊野本宮の神領にて

小名本脇（○）にあり、社家傳にこの神は上古より鎮坐して日

御崎を守ります。故に御崎を通過するもの必ず奉幣す」と

地名辞書には靈異記にある別里を以て本脇かとせり。城址あり、美濃左兵衛居城なりと

○

紀伊神名帳に

日高郡地祇 正三位御崎神

三代實録に

(八五七年)貞觀十七年十月十日乙未授紀伊國正六位上三前神從五位以下云々

三前神は果たしてここなるか知らず。西牟婁郡南部の海岸より潮岬の地へかけて、一帯を古く三前の莊といふ。三前の神は潮岬の神にあらざるか。

入山にゅうやま

丹生山の意ならむと思はるれど、續風土記には然らずとせり。もと二尾山といふと。

山上に城址ありて、青木勘兵衛由定といふもの茲に居りしと傳ふ。由定永祿十一年(一五六八年)紀二二二八三

月三好氏と戦ひて功あり、織田信長より日高郡高家庄を給はり、後豊臣家に仕へて紀伊守と改むと、續風土記に記されたれど

森彦太郎氏の意見によれば

青木氏居城云々は信じ難し。當時丸山には湯川氏あり、かかる僅かの間隔をおきて両雄こと無く對立すべき筈なし。随つて入山城は湯川氏の族の居りしものと見ざるべからず。或は(一五八五年)天正十三年(一五六五年)紀二二四五(一五八五年)丸山(丸山)落城後、日高の鎮將として短期間この處に駐まりしかも知れずと雖も、その以前に居城せしとするは系圖作者の偽作也。

現海南市日方町青木英一氏(元町長 名望家)は勘兵衛の裔なりといふ。

【關原記(写本) 青木藤原重主著 延宝戊午春(一六七八年)延宝六年(一六八六年)】に大谷刑部考澄北國攻めの條に

「北の庄の城青木紀伊守飛脚を以て大谷方へ遣はず利長大聖寺を賣申由及大事云由云々」
又曰く「大谷か日、北ノ庄城青木紀伊守を加勢攻落さば小松の城丹羽五郎左衛門長重も云々」
關原役は慶長五年(二六〇年)(紀二二六〇)なり。彼は西方に与せしなり。」

内原

和名抄に

日高郡内原郷(名所圖會にいふ版本和名抄の内厚は内原の誤ならむ)

續日本紀に

氷高評人内原直牟羅ノアタヒムラ云々(評は郡の誤ならむといふ)

天平六年出雲合計帳に

熊谷團の兵士紀打原直忍熊云々

慶長年間(一五九六—一六二五年)の里神社及鍵掛神社に

政所内原喜衛門尉云々

○

大字原谷は内原谷の畧なるべし。(地名辞書)

御所谷は後鳥羽院熊野御幸の時の頓宮址なりといふ

御幸記に

鹿ヶ脊山を越えて沓掛王子云々。(後鍵掛王子といふ。近年立つるところのものは別のものなり。)

全書に

内のはた王子云々。

萩原

熊野御幸記に

次に萩原に出で又野を過ぐ。萩薄遙に靡き眺望甚だ幽なり。此邊高家(タカ)云々
八雲御抄原の部に

はき(紀)

枕草子に

原ははきはら

崎山氏あり源義綱の(義家の弟)の裔、飛彈守家正を祖とす。大永二年(二五二三年)九月(紀二一八二)三好義長阿波・淡路の兵を率ゐて當國を攻む。由良の横濱に着し門前村におしよせ、寺田・西川・玉井等の諸氏を討ち、興国寺領の百姓數百人に命じて、池田の小坊ヶ嶺といふ所の木を拂はせて城郭とす。家正之を防がむとして長尾に城く、義長と戦うて破れ熊野にのがれ長尾陥る。義長は阿波にかへり子義継守る。畠山高國河内より來りて、湯川氏其他と力をあはせ小坊子ヶ嶺を陥る。家正の裔は湯川直光に属し河内に功あり。後農となりて萩原に住む。

(小坊子ヶ嶺とは現紀勢鐵道 池田トンネルの上の山なり)

内原驛附近に頭巾塚(トキン)あり、往時この地聖護院宮の御領たり。その山臥頭巾を埋めしところといふ。
萩木向山より銅鐸一個を発掘せり。

附近大字小中(コナカ)の神社はもと古墳の上にある。明治改修の際發掘せしに古土器あり。故東京帝國大學坪井正五郎氏の鑑定によれば、景行朝頃のものならむといふ。

○

萩原や野べより野べにうつりゆく衣にしたふ露の月かげ
萩原や露を秋風ふくからに袂をぬらす有明の月

(新千載集 藤原定家)
(新續古今集 如顯法師)

鹿背山

【ししのせ山にねたる夜しかの鳴くをききて 増基法師

うかれけむ妻のゆかりにせの山の名を尋ねてやしかもなくらむ

(いほぬし)群書類類從第

十八輯)

源平盛衰記に

權亮維盛は蕪阪をうち下り、鹿ヶ瀬山を越え過ぎて高家王子を伏し拜み、日數漸く經るほどに、千里の濱も近づきけり。云々

古今著門集に

一叡といふ僧ありけり。これも多年法花經に歸して修行しける間、紀伊國穴脊山に至りて宿したりける夜、其人は見えずして法華經をよむ聲きこえけり。一部讀み終わりにて經の聲やみぬ。あやしく思ひて朝にその程を見るに年序經たる白骨あり。更に分散せずして正躰みなつづきたり。その髑髏の中に赤き舌あり。一叡髑髏に向ひてその因縁をとひければ。舌答へて曰く。我は是れ叡山の僧名をば円善といひき、修行の間この山に至りて夭亡す。前生に法華經六萬部をよみ奉らむと願をおこして生分は既に終りにたり。はからざるに生を隔つといへども、その願を誦滿せむが爲めに猶誦するなり。今年既に讀みをはりて、まさに兜率内院に生ずべしといひけり。一叡このことを聞きて禮拜をなして去りにけり。(他書にもこのことを記載あり【元亨釋書】

(數年前好事の人鹿脊山頂に法華經塚として標注したり、山頂旧道側東少し上にあり。)

【太平記護良親王熊野落の条に

鹿ヶ背、蕪阪、湯淺、阿瀬川、小原、芋瀬、中津河云々。

既にこれらの地は賊軍の要所として固めたれば、落ちのびの困難なる由を記せり。】

【御幸記】

咨又シシノセ山を攀昇す崔嵬嶮巖石昨日に異なり、此山を超え沓カケ王子に來りシシノセ椎原を過ぐ云々】

財たから部

中古新宮の神領たり。和名抄に『中古園の莊の称あり。』名所圖會に『財部村は寶とも書す。』新宮の建曆古文書に 菌寶郷 とあり。銀を奉りしもの居りしよりしかいふか(地名辞書)。

丸山

湯川城址は湯川氏の據りしところ。但し居住は小松原なり。湯川實記(偽書なりといふ)によれば、

湯川氏は其先甲斐源氏武田氏に出づ。元祖を悪三郎信忠といふ。弘安(二七八、二七八年)の頃罪ありて熊野湯川に遠

流せらる(道の湯川)。それより芳養の内梅に居住す。孫、孫六信有勇力人に勝れ、南北朝の頃軍功

によりて、在田・日高二郡を併せ領し旗頭となりて茲に城く。其後政春あり宮内少輔に任じ、連歌

に長じ宗祇を師友とす。子直光民部少輔に任ず。永祿(二五八、二七〇年)年中三好黨と河内に戦ひて戦死す。子直春

太閤紀伊征伐の時ひとり従はず、女婿玉置氏を味方として抗せむとす。玉置氏は従はず。即ち兵二

百人を以て和佐城を攻む。玉置氏おどろきて湯淺の白檉氏、石垣村の神保氏と共に急を太閤に告ぐ

云々。(軍功とは北朝に與せしなり)

(一五八五年) 天正十三年三月秀吉、即ち仙石權兵衛尉・尾藤九兵衛尉等を遣はし、海陸より並び攻め丸山城にせまる。直春一戦に及ばず火を放つて熊野近露まで逃る。明年赦されて大和郡山に至り秀長に仕へて祿三千石を給す。幾もなく秀吉之を毒殺すといふ。その後裔は関原の時西方となり爲めに浪人す。後 淺野幸長に仕へて七百石を給す。湯川丹波守といふ。家老格にて寛永の頃廣島に住すといふ。

○ 湯川氏の領は土生村(今矢田村 千津)より海部(衣奈・由良辺)の一部は日高の海岸筋に及び、寛永の頃(一六四一、一六四四)の檢地によれば二萬五六千石なりといふ。

○ 丸山の東麓小谷に鳳生寺あり。禪宗にして窓解ユゲの鳳生寺といふ。湯川氏の七世天養居士之を建つ。箕外和尚開基。もと熊野イヤにあり。湯川直光の木像あり。この附近出土の曲玉、刀劍は帝室博物館にあり。

富 安

和漢三才圖會に

富安明社 日高郡富安村にあり

小松原明社 同郡小松原村にあり

○ 兩社祭神未だ詳ならず。毎年九月九日祭。兩社神輿出合。俗に夫婦神といふ。とあり。

○ 富安王子は熊野御幸記に田藤次王子といふものなり。善童子・出童子・出王子等いふ。湯川氏より

社領を寄せしに天(一五七三、一五九二)正(一五七三、一五九二)中没収す。

〔御幸記〕次に又王子に参る田藤次云々次に又愛徳山王子、次にクアマ王子云々〕

御坊

本願寺別院あるを以てこの名あり。本願寺は戦國の頃湯川直光(一五三二年)天文元年(一五三二年)紀二一九二に吉原に建て、有田郡星尾寺の阿弥陀佛を安置し、其子信春を住僧とす。天正の兵乱(一五八五年)に焼亡、乱後門徒有志相はかりて藺浦なる古寺内に仮堂を營み、文禄四年(一五九五年)紀二二五五佐武伊賀守、今の地に營興す。蓋し古寺内は今の淨國寺の地、吉原の地は今の松見寺なり。初め直光攝津江口にて三好長慶と戦ひ敗北せしに、本願證如之を援けたるを以てその恩を報ぜむが爲めに建つるなりといふ。

○

小竹宮シヌノミヤ趾は町の北方にあり。元宮といふ。日本書紀にいふ。

(神功)皇后南紀伊國に詣り、太子に日高に會し、議を以て群臣に及ぼし、遂に忍熊王オシクマを攻めむと欲して、更に小竹宮に遷る。適まこの時や晝暗きこと夜の如く己ミテに多くの日を経たり。時に人の曰く。これを常夜行トコヤミユクといふなりと。皇后紀直祖キアラヒノオヤトヨミ豊耳トヨミミに問うて曰く、是の恠何に由るや。時に一老父有つて曰く、傳へ聞く此の如き恠をば阿豆那比アヅナヒ之罪といふなり。問ひ給はく、何の謂ぞや。對へて曰く。二社の祝者(神主のこと)共に合葬するかと、因みて以て推問せしむ。巷里に一人あり曰く。小竹祝シヌノハフリは天野祝と共に善友たり。小竹祝病に逢うてこれに死す。天野祝血泣して曰く。吾生ける時に交友たり。何ぞ死するに穴を同じくするなからむやとて、則ち屍側に伏し自死す。仍て合葬す。蓋しこれならむかと乃ち墓を開いて之を視れば實なり。故に更に棺櫬を改め各處を異にして以て之を埋む。則ち日暉炳ヒトキハヒ、日夜別有ヒトキハヒり(★火偏ヒトキハヒに榮)

現在の小竹八幡社は延寶六年(紀二三三八年)にここより遷したるものなり。

元宮の東南に小竹祝塚として松の一本あり。碑は後人の推測により建てたるものにて、事實に合するか否か明らかならず。

天野祝は伊都郡天野社の社人ならむといふ説あり。少し遠ききらひなきか。

奇瓢あり。(二七二四年)正徳四年(紀二三七四)放生會の刻あり。八幡社の祭禮に用ひて踊る。(二六二五、二六二四年)元和の頃君上この踊りを見て感あり、寛(二七八九、一八〇一年)政に特に四恩状を賜ふと。

慶安の頃(二六五〇年頃)徳川家光の頃元年は紀二三〇八寒川作次あり。この源太郎鼓をよくし、四才君前に召され、六才禁中に召され七才江戸に召されて、能の鼓をうち賞をうくといふ。改姓して鈴木といふ。今鈴木啓市氏の家。

島の善明寺は永祿六年(二五六三年)の建立なり(紀二二二二)。寶曆(二七五、一七六四年)の頃六世玄了好んで陶器を作り、善明寺焼きといふ。土は楠井より得たりといふ。楠井に善明寺畑あり。

吉原

湯川直光本願寺證如の徳に報いむが爲めに吉原に御坊を建つ。(二五八五年)天正の乱に焼亡、後は別院は御坊に町にうつれり。

森彦太郎氏曰ふ

吉原坊舎は軍畧の意味を持つ構造なりしものの如し。西園寺旧記に曰く

吉原坊舎(直光造営)

本堂 表十間 裏 十一間 境内 東西三十八間
南北四十五間

築地 高さ八尺 上口 一間

堀上口 八間 鐘樓 一間半四方

今松見寺の背後七五三、七五四、七五五、七五六、七八八各番地にわたりて凹處あり。
濠の跡なりと云々。

當時の礎石にして残れるもの西川畔に二、あが裏庭に一あり。(★田端憲之助邸のことか SIMIAKI)

○

大松原出土の古土器は松原小學校にあり。

日高濱を煙樹濱といふは、近年東京の畫家近藤浩一路氏の名つけたるものにて、古き名称にはあらず。濱の瀬海岸より見たる一里の松原の遠景は、實際煙樹模糊たる趣ありて、よくいひ現はしたれど、多少固きにすぐる感あり。

昭和七年十月この海岸にて海陸聯合演習あり、閑院宮・朝香宮・久邇宮・賀陽宮四宮殿下の台臨あり。

小松原

御幸記に

十日(畧) 次寄小松原御宿【云々、此御所水練の便宜あり深淵に臨んで御所を構ふ云々】

雨月物語(蛇性の淫)の巻に

小松原の【道成寺に法海和尚とて貴き祈り師のおはす云々】

續風土記に

此辺上古入江なりしが中世潮退き、小松生ふる原となりしならむ』とあり。
熊野御幸記に

小松原御宿云々臨_ニ深淵_一構_ニ御所_一

とあり。右の地は御所の瀬と称せらる。とにかくその頃は尚日高川の滙流なほこの辺に入りこみ居りしならむ。

西北小名土居は湯川氏の邸址なりといふ。土居の附近に歌仙堂址あり。湯川政春宗_〇祇_〇を講じて連歌會を開きしところといふ。

かげ涼し なほ木高かれ 小松原(宗祇)

藤井

名所圖會に

日高名産紡糸は多く藤井の産にして京都に送り、製品特佳なれば本座紡と称美す。とあり、徳川時代にはここよりカセの積出し多かりし如し。

丹生野

大山神社は合併して今なし。この神社は由緒ある神社として、南方熊楠の殊にその遷座を惜しみ社なり。後世熊野神社の神幸例となりし地なり。

早蘇

紀伊國神名帳に

日高郡 從四位早蘇神

今いづれの社なるを知らず。

道成寺

文武天皇の勅願にして、紀大臣道成奉行して建立すと傳ふ。但し當時の大臣に紀道成といふ人史に記載なき故、大工の棟梁などの名ならむと論ずる人もあり。堂舎古くは十六七あり、寺領も多かりしに其後衰へたるを、(二六〇年頃)慶長中淺野氏燈油料を附す。屋上の鬼瓦に天授(一三七五年)元年は紀二〇三五・後龜山天皇の頃・享祿(一五二八年)元年は紀二一八八・後奈良天皇の頃等の年號あり。

安珍清姫の傳説は、安珍を鞍馬山の僧とも(元亨釋書)奥州白河の僧ともいへり(縁起)。

清姫は西牟婁郡栗栖川村眞砂の庄司清次の寡婦なり。(姫といふ字に拘はりて處女の如く傳へらるるは誤ならむ。續風土記には清人徐葆光の中山傳言録中の鐘魔の記事に酷似すとしてその記事を援けり。琉球の事件なり。)

鐘 魔(譯文拙にして且つ誤なきを保せず)

中城縣姑傷村の農家陶といふ姓のものに兒有り。松壽と名づく。年十五歳白晳端麗なり。首里に至つて師に従う。一日行いて浦漆に至る。山徑の中昏黒に向ふ。一竹竿を持し地を點をして行く。燈を見て宿を求む。乃ち一獵家なり。父出でて夜獵し一女を止む。年十六頗る妖麗なり。留め宿せしめて之を挑む。松壽衣を拂つて起つ。女羞ぢ且つ怒り獵具を持って松壽を殺さむと欲す。松壽走る。女之を逐ふ。山曲に方壽寺あり主持の僧普徳頗る行有り。松壽奔り入つて救を乞ふ四顧隱處なし。僧之を大鐘の内に伏せ、三徒をして鐘の旁を守らしむ。女至る三僧

戯れ黽つて之を逐う。女松壽を得ず天を仰いで癡なる如く門を出でて去る。僧鐘を啓けば聲あり。女還り奔り入つて方に惡を爲なさむと欲し、忽ち披髮形を改め鐘内に入る。普徳諸僧と鐘を繞つて之を咒す。女鐘より倒に首を垂れて出で見るれば鬼面、手一又諸僧を下撃す。僧咒して已まず。寺外大雷電す。女魔と化して走り出で在る所を知らず。是百年前國中の事云々。

(女自鐘倒垂首出見鬼面手一又下撃諸僧)の大譯文に誤あるべし。

道成寺の鐘は今京都妙満寺にありといふ。土生村(今千津といふ)の住人源萬壽丸吉田頼秀の鑄とこ(一三五九年)ろ(正平十四年(紀二〇一九)故障ありて山中に捨てたりしを、天正の兵乱(天正一五七三、九二)に轉々して京都に至りしものといふ。萬壽丸は逸見氏ともいふ、矢田莊を領す。

道成寺の建立は文武の慶雲年間(元年は紀一三六四)のことなり。

附近田中より銅鐸一個を出せり。

【上田秋成の雨月物語に

小松原の道成寺に法海和尚とて貴とき祈り師おはす、今は老て室の外にも出でずと聞けど云々】

岩内

御幸記にいふ

渡レ河参ニいはうち王子一【此辺の小家に入る重輔庄云々】

和名抄に

日高郡 岩瀨郷

とあるを、續風土記に今の寒川地方としたるは、如何なる故ならむ。

『岩内王子は御幸記の頃は、日高川岸字王地にありしものと推定す。後世大洪水ありて社地標歿

後、字 田端に營興す。近世の岩内王子之なり。明治四十一（一九〇八年）年熊野神社に合祀す。』（森）

熊野イ ヤ（ユヤの訛れるなるべし）

熊野権現は古昔神輿田辺に渡御す。後丹生野大山神社に渡御すといふ。徳川時代徑寸餘の白玉二顆・古鏡二面・太刀等を發掘るしたることあり。寛文十年（一六七〇年）（紀二三三〇）に記したりといふ神歌は殊に有名なり。

熊野神社神歌

はつ王子の峯の細道ほそくとも、オオほそくとも、つれだに行くば車路とせう
はつ王子の峯の道こそおはしませ オオおはしませ 春吹上のほでの寒きに
東山かうらうの峯におぼれ出 オオおぼれ出で 外山おつるちやうの早さよ
奥山や大峯杉にそなれ出で オオそなれ出で 峰なる花をおりくたすとよ
朝日さす夕日かがやく熊野山 オオ熊野山 いづれもだけに雲やかからむ

○

筑紫舟のぼるときけば紅つけて オオ紅粉つけて 齒黒めされて出てすきあら
やはた王子を宮とは申せども西は海 オオ西は海 東はなぎさ御前まします
鷹の子はいづくかすみか丹生の山 オオ丹生の山 今おり居所は耳鳴の宮
まろたちは揃ゆる折は深山なる オオ深山なる 大黒小黒もおしからず
日の御子は日の山からぞおはします オオおはします 帶劔ときて今ぞまします

この里の山中にて、さる武士の大蛇を退治したる傳説あり。

天田

建曆文書に

菌寶郷。

雨は甘田、亀石、富嶋を限る』とあり。

鹽屋

【御幸記に

山を超えて塩屋王子に参る、この辺又勝地、祓あり云々。】

靈異記にいふ

紀伊國潮みなとに、紀萬侶朝臣といへる人あり。網を結びて魚をとることを業とする云々。

事は宝龜六年(七七五年)紀一四三五なり。茲に潮みなととは鹽屋のことならむといふ。

道成寺縁起には潮くむ海人の圖を画きて、『茲は鹽屋といふところ』云々とあり。

鹽屋王子は、白河法皇熊野御幸の砌、草枕を結びて歌會を開かれしところ。御所の芝とて、今社内

に遺跡あり。大塔の宮熊野に落ちさせ給ふ時も、社前にて御祈誓あり。寛政(一七八九、一八〇二年)の頃美人王子といふ

とぞ。

○

思ふこと汲みてかなふる神なれば塩屋に跡をたるるなりけり

立ちのぼる鹽屋の烟浦風になびくを神の心ともがな

いさり火の光にかはる烟かな灘の塩屋の夕ぐれの空

沖つ風鹽屋のうらをふくからにのぼりもやらぬ夕げむりかな

こととはむしほやの里に住むあまもわがごとからきものや思ふと

うしや今しほやときくも所がらからき旅路にゆきなやむ身は

(千載集 後二條内大臣)
白河院御幸の時

(徳大寺左大臣)
正治御幸の時 切目に

(藤原 家隆)

(夫木抄 第三皇子)

(宗尊親王)

(似 雲)

うちたえてやかぬしほやの浦人は月に煙やいとひはてけむ
まゆにほふ遠山あをし春の海

(宗 祇)

野 島

熊野遊記に『天正年中(一五七三、一五九二)元年は紀二三三和泉淡輪村梶原一黨海賊となりて紀州にて上野・野島にて山伏を殺し云々』

山臥塚は十三塚ともいふ。古昔出羽國羽黒山の山伏、熊野に詣でむとしてこの地をすぎけるに、阿波國海賊あまた上陸して其山伏を悉く殺害し、旅用の資財をうばひとりたり。里人十三人の死骸を分ち葬り、又海賊等を亡ぼし、その賊等の屍をも合葬し千人塚といふ。この地海を隔てて阿波の鍬八丁(クハツチャウ)に相對せり。細雨陰慘たる夜鍬八丁の方にあたりて、陰火の燃ゆることあるは、海賊の妄念なりと傳ふ。

古墳のあと二あり。

あがほりし野島ヌシマはみしを底ふかき阿胡根の浦の珠ぞ拾はぬ

(萬葉集)

右は紀伊に関する歌として野島とせられ居れどいかがあらむ。この辺の地を名田といふは灘の意なるべし。

上 野

湯川直光の麾下に、湊上野といふものあり。上野に城く。後河内に戦死す。堂の谷の墓はそれなら

むといふ。

【御幸記 次の上野王子 野徑なり云々】

○

昔見し野原は里となりにけり數ふる民のほどぞ知らるる

(續古今 入道前太政大臣)

いく潮か由良の港をこぎいでぬ上野の鹿のごよむなりけり

(夫木集 覺講法師)

秋風に上野のすすきうちなびきほのめかしつるかひもあらなむ

(清 輔)

【御幸記 次ニツイノ王子】

印 南

【御幸記 次にイカルカ王子に参る云々】

富王子は御幸記に伊加留賀王子之なりと。大塔宮南都般若寺を落ちて熊野に入らせたまう時、この宮に通夜して、行く末を祈らるといふ。

土俗東宮さんといふは、大塔宮を祀れるがごとし、といふ。

切 目

【御幸記

次に切部王子に参る云々 此宿所に於て塩垢離かく、海を眺望するに甚雨にあらざれば興あるべきところなり 云々】

【御幸記

十二日云々 切部中山王子に参る】

平治物語に藤原信西(道憲)が切目王子社前にて相人にあひ路上に首をさらす相ありと告げられたること見ゆ。又平清盛熊野参詣の途にて、信頼・義朝の變をききこの社前より急ぎ都にかへりしこと見ゆ。

元弘の乱には護良親王十津川に入り給はむとして、この社殿にて一夜をあかしたまひ、神明の感應ありしこと太平記に見ゆ。

由良の湊を見わたせは沖こぐ船の楫緒絶え 浦の濱木綿いくへもとも知らぬ浪路に鳴く千鳥、
紀伊路の山々渺茫と、和歌吹上をよそにみて、月にみがける玉津島、光も今はさらでだに……
…………… 雨を含める孤村の樹、夕を告ぐる遠寺の鐘あはれを催す。折しもあれ切目の

王子に着きたまふ。その夜は叢詞祠の露に御袂をかたしき夜もすがら云々

切目王子社の竹柏(椰)の葉は熊野参詣のもの必ずこれを挿頭かざしとす。天正(一五七三〜一五九二年)の頃此社兵火にかかりて神寶等焼失したるを、其後ある比丘尼再興す。寛文二年(一六六二年)(紀二三二二)官により、竹柏・楓等を植ゑて神位をも寄せたり。

保元物語 鳥羽法皇熊野御幸の條に

日頃の御参詣には天長地久に事よせて切目王子の竹柏の葉を百度千たびかざさむことこそ思し召されしに云々

平家物語にもこのこと見ゆ

御所屋敷は社地の東北四十間許にあり、後鳥羽院熊野御幸の時の御跡なる如し。

切目山ゆきかふ道の朝がすみほのかだにも妹にあはざらむ (萬葉集)

【霧中聞浪 野徑月明】

うちもねずとまやに浪のよるのこゑ誰をと松の風ならねども (藤原定家)

ふるさとはまたしぐるらしまさきちるみやまのあられ色かはるなり (藤原家隆)

【切目懷紙

藤原 道光】

岩代

齊明天皇の四年(六五八年)紀一三一八) 天皇牟婁の温泉に行幸中、留守中の有馬皇子叛をはかりしが、蘇我赤兄の爲に告げられ、とらへらて紀伊に送らる。途中岩代にて御詠あり。

磐白磯の濱松ヶ枝をひきむすびまさきくあらば又かへりみむ

これより歌枕の地となる。皇子は湯崎にて中大兄皇子の訊問にあづかり、歸途藤白の阪にて斬らる。蓋し天皇の紀伊よりかへりたまへしは翌年三月なれば、一旦護送して又還したるなるべし。地名辞書は藤白を以て磐白の誤ならむとしたり。

【御幸記 次に濱に出で磐代王子に参る此所御小養御所たり、入御なし、此参拜の板毎度御幸人數を注せらる、先例なりと云々。上世権北面寛快已下三人云々】

○ 磐白の濱松ヶ枝をひきむすびまさきくあらば又かへりみむ

(萬葉集 有馬皇子)

家ケにあれば筥ケに盛る飯イヒを草まくら旅にしあれば椎の葉にもる

(萬葉集 有馬皇子)

こといたくばへまてと思ふをかもかくせむを岩代の野べの下草我しかりてば

(萬葉集)

君が代も我が世も知らむ岩代の岡の草根カヤをいぎ結びてな

(萬葉集)

わがせこはかりほつくらすかやなくば小松が下の草をからさね

(萬葉集)

岩代の野中に立てる結び松心もとけず古思うほゆ

(萬葉集)

後みむと君が結べる岩代の小松がうれを又見けむかも

(萬葉集)

たまきはる命はしらず松が枝を結ぶ心は長くとぞ思ふ

(萬葉集)

八千草の花はうつらふ常盤なる松のさえだを我は結ばむ

(萬葉集)

白浪の濱松ヶ枝のたむけ草いくよまでにか年のへぬらむ

(川島皇子)

いはしろの岸の松ヶ枝むすびけむ人はかへりて又みけむかも

(長忌寸意吉磨)

つばさなすありがよひつつ見らめども人こそしらね松はしるらむ

(山上憶良)

たのみこししるしもいかが岩代の野中の松に結ぶうらみを

(後鳥羽院御集)

ゆくすゑは今いくよとかいはしろの岡のかやねに枕むすばむ

(新古今集 式子内親王)

岩代の玉松ヶ根の石井筒むすべるかげを又むすぶかな

(鴨 長明)

【いほぬし 増基法師

いはしろの野にねたる夜ある様あるべし

石代のもり尋ねてといはせばやいく夜か松はむすび始めし】

この地にしととの藪といふところありて、神武天皇御上陸の地とつたふといふ。

千里の濱

(センリのはま)
(チサトのはま)

枕草子(百八十四段)に

濱は卒都の濱、吹上の濱、長濱、打出の濱、諸寄の濱。千里の濱こそ廣う思ひやられるれ。

伊勢物語(七十七段)に

三條の太行幸せし時 紀の國千里の濱にありけると面白き石奉れりき 云々。

太平記に

元弘元年七月三日大地震 紀伊國千里ヶ濱干潟となること一里云々。

【御幸記に

是より又先陣千里の濱を過ぐこの處一町許千里王子に参る云々。】

○

末遠き千里の濱に日はくれて秋風おくる岩代の松

(夫木抄 寂恵法師)

見渡せば千里の濱の外までも尚たちあまる春がすみかな

(浄 忠)

雪にのみうつりはてぬる心かな千里の濱にすめる月影

(源 通光)

雪まもる千里の濱の月かげは雲にしられてふらぬ白雪

(藤原定家)

遠妻をとふや千里の濱ちどりさそなくなるしき夜なよなのこゑ

(牡丹花)

海蝕洞あり千尋洞と名づく。第三紀砂岩の波浪によりて侵蝕貫通せしものなり。

南部

古書に三鍋の字を宛て、又中世御南部莊といへりといふ。古の部曲称御名代、御名部の民などいふ語に關係あらむかといふ人あり。

古事記開化天皇の條に

豊波豆羅和氣王者御名部造之祖

とあるを地名辞書に茲なるべしとせり。

【いほぬし 増基法師

ちかの浦にてこいしひろふとて

うつ浪にまかせてをみむ我拾ふはままの數に人もまさらじ】

【いぬほし 増基法師

みなべの濱にて知りたる人のみやまよりかえるにあひぬ 云々
今昔物語に

今は昔天王寺に住む僧ありけり。名をば道公といふ。熊野に詣で紀伊國美奈部郷の海辺をゆく程に日暮れぬ。然ればそのところに大なる樹の下に宿す。夜明けぬれば樹の下を廻り見るに道祖神を造りたるあり。其形旧り朽ちて多くの年月を経たり見ゆ。男の形のみありて女の形はなし。前の板にかきたる繪馬あり。足の所破れたり。道公その繪馬の足の所のやぶれたるを糸を以て綴り本の如く置きつゝ。道公その日止まって尚樹の本にあり。夜半ばかりに年老いたる翁來れり。誰人と不知。道公に向つて拜して云く。昨日駄の足を療治したまへるによつて行疫神をのせ送りぬ。尚草木の枝をもつて小さき柴の舟を造つて、わが木像をのせて海の上に浮べて給へ、とて搔消つやうに失せぬ。道公道祖の言に随つて、忽ちに舟を作りて海上に放ち浮ぶ。其時に風不立波不動して柴舟南をさして走り去るとなむ 傳へたる。

【御幸記に

次に三鍋王子に参る】

○
中古愛州氏の領たり。

この附近及上南部等より銅鐸の出づるもの既に四。

○
大寶元年(七〇一年)(紀一三六一)太上天皇(持統)大行天皇幸紀伊國時歌

みなべの浦潮なみちそね鹿島なる釣りするあまを見てかへりこむ

(萬葉集)

紀の海の堺の浦の沖つ藻を春のひぐらしかづくあま

(頼尋)

夏と秋とさかひの浦の松風にかたへすずしく寄する白浪

(圓會)

【熊代繁里、山内繁樹はこの産なり】

【山内繁賢の安政津浪の記あり】

(★宝永の津浪では？ SMIYAKU)

小原長瀧

(高津尾附近の小字名なり)
(今中木といふ地ならむといふ)

享保(元年は紀二三七六)の頃吉澤あやめあり、この地の出身なりといふ。女形役者として名を三都に知らる。(吉澤あやめは數代あり、この人は何代目ならむか)

川上

日高川上流地方を中世川上莊といふ。川上采女といふもの、和佐城に居りて之を治む。

玉置氏攻めて之を殺しその邑を奪ふ。野口より福井まで、並に有田郡津木村を領す。
寛永の檢地一萬五六千石ばかりなり。

玉置氏の祖を葛島十郎資平といふ。壽永の頃(元年は紀一八四二)熊野山中にのがれ玉置山社人となる。承久以後鎌倉の家人となり玉置氏を名のる。五世の孫盛高大塔宮熊野に入りたまふを拒み、戦へること太平記に見ゆ。湯川家とは姻戚の間柄なり。後豊臣秀長に属す。然るに禄少きを以て高野に入り仙光院上人と称す。秀吉、玉置は忠功のものなれば目をかけよと助言、即ち之を召す。依て還属す。後尾張家に属す。その被官は藤堂大學に属す。

神場

正徳年間(元年は紀二三七一)愛川の遍照寺の僧順栄といふもの、始めて此地の嶽間の水に硫黄の

氣あるを知り、汲みとりて湯とし、客室をも作りたりと。

阿田木権現

社の建(二二三、二二九年)保縁起奥書に

熊野大神出雲より神宮に遷坐の後、數世を経て延喜(九二二年)二十二年日高川の上大原峯にうつり給ふ。
後七年延長六年(九二八年)に阿田木原に出現す云々。(詳しくは紀州名所圖會参照)

矢筈嶽

山中に鷲川の瀧あり

あら鷲の天雲はぶく風はやみ 岩切る瀧の音どよむなり

(加納 諸平)

寒川

續風土記にいふ。

寒川氏此地居住・檢地千石計、秀吉征伐の時内通す。

山路

昔は山地と書く。山路は明治以降の町村名なりと。

山地氏東村に居住す。今高千二三百石 秀長征伐の時引請け宮代山にて一戦し伊藤甲斐守を討つ。後諸方の討手により破らる。

山地氏は玉置氏の一族にして、その宅趾は東村にあり。按ずるに弘安(二七八、二七八年)の頃に玉置庄司盛高あり、子なし。左衛門尉藤直光を以て家督とし所領を譲る。直光三子あり、長は玉置山の別當をつぎ、次

子・三子は日高郡川上莊・日高郡山地莊の二所を畧有して別當となる。

(一五七三、一五九二年)
天正年中に亡びしか。

鶴ヶ城は山地氏の居城なり。

○

(一八六三年)
文久三年天誅黨の乱に

水郡 長雄(河内の人 三十九歳) 全長男英太郎(十三四才) 吉田重藏(筑前)

石川 一(因幡) 原田 龜太郎(備中) 保母 健(備前)

田中楠之助(河内) 辻 幾之助(河内)

等九月二十一日紀州山地奥丹生ノ川の菅野(スガノ)に來る。北折して山を越え二十二日龍神小又川に達す。意を決してその營に自首する。應接方吉本倍助(任)之(タモツ)を農夫喜助の倉に収容す。

倉の壁板にかきつけたる歌

皇國の爲めにと盡す誠心は神ぞしるらむ知る人ぞ知る (水野長義)

又六十六部遍路人に托し故郷の母へ

秋の野に露とけぬべき命とも知らでや人の我をまつらむ

また長男英太郎の傷をいたはりくるる紀藩士等の情を謝して

鬼神もおそれざれしがまことある人の情に袖ぬらしけり

○

明治維新前 田中光顕伯らこの地丹生の川千葉家にかくまはれしことありといふ。

慶應元年正月二十八日來寓、居ること二ヶ月余。
(八六五年)

月夜前年辞故國 花朝今歲臥他郷
一聲老獲肅然處 欲断男兒鉄石腸

(田中光顯)

龍神

祇園海南に龍泉紀行あり。土傳に元和(二六二五、二六三四年)の頃(元年は紀二二七五)国主の命によりて浴室を造るといふ。湯は梅毒に神効ありといふ。

護摩壇は平維盛身の浮沈をトすべく、ここにてゴマを焚きしなりといふ。標高一三七〇米。紀州の最高峯なり。

本書は松原村吉原の人 田端憲之助の編する処
昭和十一年五月頃成りしものより 余、芝口常楠氏の
許にて是を見 即ち田端氏に請いて贈られしもの
書中の書込みは田端氏のものなり

あとがき

どうしたわけか『日高郡古記ぬきが記』のデジタル化が抜かっていた。もっと早く見つかって読んでいたら、今までの活字化に大変参考になったと思う。

昭和の初めと現在では学説も著しく替わっているが、そのまま書き写した。この小冊子一冊あれば、標題の通り日高の古記が殆ど判る書である。

原本は謄写版印刷で、父の後書きにもある通り各所に毛筆書で書込みがあり、書込みは【】で囲んだ。年号に付けた西暦はデジタル化の時にルビ付けしたものである。

平成二十(二〇〇八)年四月四日

清
水
章
博